スイス日本語福音キリスト教会

# JEGニュースレター145号

www.jegschweiz.com　　２０１４年６月２７日発行

### 小さな証

南国・宮崎で福音を伝えるローゼンクランツ宣教師が、日本に渡る１０年前にスイスで見た夢とは。

### イスラエルとキリスト者

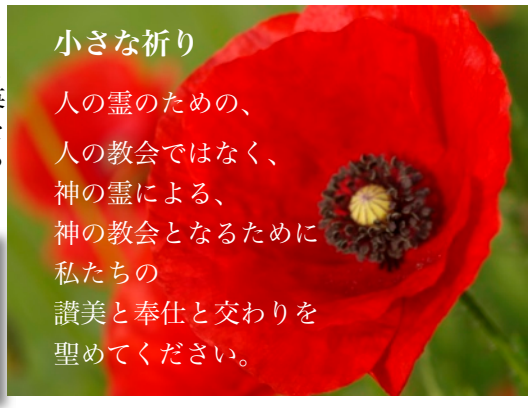
第二回信徒教育セミナーが”イスラエルとキリスト者”をテーマに６月２２日にスイスJEGで開かれました。

### JAPANTAG

日瑞修好150周年にあたる2014年、公式事業としての”日本の日”にスイスJEGは企画運営に携わりました。

### メティカフ師を偲んで

召される日まで日本と日本人を愛し続けた英国人メティカフ先生を偲んで、師と深く関った兄姉からの寄稿です。



### 小さな祈り

人の霊のための、
人の教会ではなく、
神の霊による、
神の教会となるために
私たちの
讃美と奉仕と交わりを
聖めてください。

「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。 しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」　　ルカによる福音書　22: 31,32

## メティカフ先生、”また会う日まで”

中国宣教師の両親のもとに生まれ（1927年）、そのため少年期に中国で日本軍の捕虜となり、収容所でエリック・リデル宣教師（元・オリンピック金メダリスト、映画「炎のランナー」主人公）に出会い、山上の垂訓（マタイ伝）より“敵を赦すこと”をリデルに教えられ、青森などで38年間、宣教師として日本人を愛してくださったスティーヴン・メティカフ先生が、6月7日夜、地上の生涯を終えて天に凱旋されました。

小川洋 facebook (6月8日)より

Photo:　第２３回　ヨーロッパ・キリスト者の集い　スイス・エメッテンにて　2006

# ちいさな証

## イエス様に変えられて

ローゼンクランツ・クリスチャン
ジーザスコール宮崎教会

スイスから日本に来てかれこれ10年が過ぎました。振り返るとき、ちょうど10年前に見た夢を思い出します。

日本に来る直前、夏のドイツでの修養会にみなさんと出席し、その後直美と4か月の志音と一緒にドイツのヘルンフットに数日滞在しました。

ヘルンフットは、18世紀におよそ100年間に渡って24時間の祈りがささげられた場所で、その間多くの宣教師たちが送り出されていった村です。そこで私が見た夢とは、日本地図の端々に小さな火が灯っており、その小さな火が次第に増えていき、しまいには大きな一つの火となるというものでした。その夢に励まされ、日本へと出発しました。

今になってみると、この夢の意味がもっとよくわかる気がします。宮崎で開拓を始めてから、おもにキャンパスでの伝道のため4つの大学でのバイブルスタディーをしていましたが、ここ数年はより地域に根付いた教会として、働き人を立てあげることを始めました。今、これまでに蒔いてきた種が少しずつ、少しずつ芽を出し始めているのを感じます。この4月から、10名のメンバーが教会のミニストリースクール2期生として出発しました。

彼らと言えば、かつてひきこもりだった人、リストカットを常習的にしていた人、やくざに育てられた元ギャングスター、離婚の危機に教会に来て救われた精神科医、などなど…。彼らの情熱は、自分がどれほどイエス様に変えられたかを家族や友達に証しすることによって、その人たちをもまたイエス様との出会いに導くこと。それはまさに小さな火のようです！

日本の若者たちが闇から光へと変えられ、神の働き人へと変えられていく姿を見る時、何度見ても、この上ない感動を覚えます。

イエス様が漁師やいろいろな背景の人々を招いて弟子とし、彼らがついには遣わされて大きな働きをしていったことをいつも思い出しながら、私もまたイエス様の弟子として歩みつつ、これから神様がどんなすばらしい働き人達を日本で起こしてくださるのかを楽しみにしています。

皆さんも九州に来られることがあったら、ぜひ遊びに来てくださいね！

Nun sind schon mehr als 10 Jahre vergangen seit wir die Schweiz verlassen haben. Ich erinnere mich immer wieder an den Traum, den ich hatte, kurz bevor wir nach Japan abreisten. Nach dem Sommerlager mit anderen Japanischen Gemeinden in Nord Deutschland 2003 bin ich zusammen mit Naomi und Baby Zion nach Herrnhut gefahren. Herrnhut ist der Ort wo im 18ten Jahrhundert über hundert Jahre rund um die Uhr gebetet wurde und viele Missionare ausgesendet worden sind.

In meinem Traum sah ich die Landkarte von Japan mit vielen kleinen Flammen über ganz Japan verteilt, die zu einer grossen Flamme zusammenschmolzen. Ermutigt durch diesen Traum sind wir dann nach Japan umgezogen. Wenn ich jetzt über den Traum nachdenke, glaube ich, dass ich ihn etwas besser verstehe.

Nachdem wir in Japan angekommen sind, haben wir uns hauptsächlich auf Universitäts Studenten ausgerichtet. Als Miyazaki Campus Church hatten wir Bibelgruppen auf vier Universitäten. Aber in den letzten drei Jahren fingen wir an Gemeinde Mitarbeiter auszurüsten für den Dienst. Wir arbeiten nun mehr auf lokaler Ebene. Langsam sehen wir Frucht von aller Saat die ausgesät wurde.

Von diesem April an haben wir unsere zweite Ministry School mit zehn Gemeindegliedern angefangen. Darunter sind Hikikomoris (solche, die das Haus nicht verlassen), oder Hoffnungslose, die sich mit Messern ihre Arterie im Handgelenk aufgeschlitzten, oder Gangster, die von der Maffia aufgezogen wurden, oder eine Ärztin, die wegen einer Scheidungskrise in die Gemeinde kam. Alle dienen nun mit grosser Leidenschaft in der Gemeinde und wollen ihre Freunde und Verwandten zu Jesus zu führen.

Wenn ich das sehe, denke ich immer an Jesus, der Menschen aus den verschiedensten Verhältnissen herausgerufen, sie zu Jüngern gemacht und sie ausgesendet hatte, um grosse Werke für Gott zu tun. Auch ich will ein Jünger Jesu sein und ich bin begeistert zu sehen wie Gott mehr Arbeiter für das Reich Gottes ausrüstet.

Wenn du eine Gelegenheit hast auf die Insel Kyushu zu kommen, komm und besuche uns doch.

１、第二回信徒教育セミナーが、第一回の”聖書とイスラエル”に続いて”イスラエルとキリスト者”をテーマに、６月２２日（日）の午後一時から、マイヤー牧師を講師としてクリショナ教会にて開かれ、参加者は聖書をヘブル的視点から正しく理解することを学びました。

セミナーでは、”イスラエルはその不従順によって神に捨てられた。もはや神に選ばれたのはイスラエルではなくキリスト教会である”という正しい聖書理解から外れる”置換（ちかん）神学”が、1700年以上に渡るユダヤ人迫害をもたらし、現在も世界で続行中であることなどを、イスラエルの歴史とともに学びました。このセミナーのビデオはスイスJEGのHPにアップロードされていますので、今回参加出来なかった兄姉や、復習をされたい兄弟は是非ご利用下さい。http://www.jegschweiz.com/聖地旅行-2014/

また、９月には秋のイスラエル旅行の参加者を対象に、目的地に関するセミナーが予定されています。

２、礼拝においては、”使徒の働き”講解メッセージが続けられています。現在は使徒達のエルサレムにおける働きと証しに焦点が当てられています。現在に生きる私たちが、キリスト者としていかに生きるべきかの適用が豊富にあり、これからの波乱に富む使徒の働きの展開に期待しています。この講解メッセージはスイスJEGメッセージ専用ＨＰで日独語でお聴きになれます。http://jeg.meielisalp.ch

３、５月３１日（土）キリストの昇天日後、CSとユースのファミリーBBQが、晴天に恵まれチューリッヒ郊外フォルケッツヴィルの森で開かれ、３０名の参加者は祝福された交わりの時を持ちました。以下はファミリーバーベキューを企画されたトムセン千香子姉の報告です。

参加者のなかには、教会外からのご家族もあって、これからもこの会が外部の方と教会が繋がる機会となればいいなと願っています。

ケルン、ボン教会の斉藤篤先生が、スイスに滞在されていたこともあり、メッセージを取り次いで下さいました。先生の大変分かりやすいお話に、子供も大人も未信者の方も吸い込まれるように耳を傾けていました。斉藤先生、ありがとうございました。

そのあとのバーベキューでは、ソーセージ、ハンバーガーはもとより、チョコバナナにマシュマロ、焼き芋と盛りだくさんのごちそうにみんなお腹がいっぱいになりました。

そして少し時期的に早いのですが、JEGリトリート恒例のスイカ割りをして盛り上がりました。はじめから終わりまで、楽しい交わりのときを過ごさせて下さった神様に感謝です。

今年来ることが出来なかった方、是非次回はご参加下さい。ご参加して下さった方、ありがとうございました。また来年もしましょう！

４、日瑞修好１５０周年記念事業として開催された第３回”Japantag-日本の日“は会場をサンクトガーレン市からボーデン湖湖畔の町ロマンスホルンにて、６月14日(土）から15日（日）にかけて、日本と日本文化に親しもうとする多くのスイス人来訪者を迎えて盛大に開かれました。

スイスJEG ユースのお好み焼

この”JAPANTAG“の企画運営には、スイスJEGの役員２名が初めから携わったほか、当日のスイスJEGブースとユースグループの”お好み焼きスタンド”（行列ができるほど人気があり、48枚の売り上げ！）には教会からも13名の奉仕者が与えられ、おおいに賑わいました。また、前夜祭においては、マイヤー牧師が”スイス人と日本人：精密と正確への共通した愛”をテーマに、生まれ育った日本での経験をもとに講演され好評を得ました。このJAPANTAGのビデオとスナップは以下のURLでご覧頂けます。http://meinappenzellerland.jimdo.com/japantag-in-romanshorn/　今回の”JAPANTAG“で得られた収益金485000円は、ふくしまHOPEプロジェクト（キリスト教団体）、オアシスライフ・ケアーの支援する石巻市の海友支援隊ならびに七ヶ浜図書館に贈られます。皆様のご支援とお祈りに感謝します。

５、６月７日に召天されたスティーブン・メティカフ先生の葬儀は、６月20日（金）午後２時から、トリニティ・ロード・チャペル（バプテスト教会）で、同教会ディヴィス牧師の司式で行なわれました。以下はメティカフ先生と親交をもたれた小川洋ロンドン日本語改革派キリスト教会牧師からの報告です。

式の前に、メティカフ先生の奥様、エヴリンさんに御挨拶をされました。5人（4男1女）のお子様たちと10～15人以上のお孫さんたちが、エヴリンさんを取り囲むように座られました。式が始まると御棺が4人のお子様たちによって担がれて、会堂に入場しました。

式には、200名から250名くらい参列されていたと思います。日本での奉仕があって間にあって帰英することの叶わなかった盛永進先生に代わって、葬儀のために前日に帰英されたばかりの盛永先生の奥様や、恵子ホームズさん、園田邦夫先生、英語版のメティカフ先生の自伝の共著者のR. クレメンツ博士（ユーロジー・長い弔辞をされた）、駐英日本大使代行も参列されました。

式の中で、日本語教会・日本語礼拝を代表して、また盛永進先生の代行で、私（小川洋）がトリビュート（短い弔辞）をいたしました。その後で、メティカフ先生が協力宣教者として働かれたロンドンJCF　を中心に、私たちの教会や、ウィンブルドン日本語礼拝、イーリング・クリスチャン・センター日本語部に集う者たち（約25名）が前に出て、日本語で讃美歌「いつくしみ深き友なるイエスは」を賛美しました。青空の広がる2014年夏の日の思い出の1ページとなりました。

６、オーニンガー宣教師、クンツ・プリスキラ宣教師、ラシェンコ・ベラ宣教師、マルティン裕子宣教師からのRundbrief　、工藤篤子メルマガ　、井野葉由美メルマガ号、バルセロナ日本語で聖書を読む会月報、デュッセルドルフ日本語教会月報、ケルンボン教会月報、ルーマニア川井牧師の週報、パリ教会パルタージュ、イザール通信、在欧機関紙、夜越山庵の家月報、オリーブ山便り（イスラエルよりの最新情報）最新号が届いています。お読みになりたい方は、松林までご一報下さい。

# 赦しと愛に生きた人

小川洋

ロンドン日本語改革派キリスト教会 牧師

スティーヴン・A・メティカフ先生が、6月7日、地上の生涯を終えて天に凱旋されました。10日間に及ぶ集中治療室での闘病のあと、奇跡的に丸一日の小康を得、最後の病床訪問者となった恵子ホームズさん（日本軍捕虜との和解運動で知られる）と訪英中の東北・塩釜教会の若い牧師と共に日本語で祈り、賛美歌を歌い、その夜、平安のうちに召されました。

先生は、中国宣教師の両親のもとに生まれ（1927年）、そのため少年期に中国で日本軍の捕虜となり、収容所でエリック・リデル宣教師（元・オリンピック金メダリスト、映画「炎のランナー」主人公）に出会い、山上の垂訓（マタイ伝）より“敵を赦すこと”をリデルに教えられ、青森などで38年間、宣教師として日本人を愛してくださいました。日本宣教時代を終えて帰英されてからも4半世紀近く、ロンドンを中心に英国・欧州で日本語の群れに関わって、多くの日本人の魂に触れて来られました。

エリック・リデル

私自身も、危機的状態にあったと思われた時、メティカフ先生のルカ伝22章31,32節の説教で、主から大きな慰めを受けました。また、辛いと思い込んでいた時、言葉無しに、ただ優しく抱いてくださいました。そして、思い悩みの中にあった時、「あなたの苦しみは分かります」と言ってくださいました。

主イエスの姿にどんどん似て行き、キリスト者のとしての芳しい香りを放ち、聖化の歩みも完成されつつあったので、天から「もう十分私のために働いた。安心してこちらに来なさい」、と声があったのだと思います。

かねてより、メティカフ先生が病気と闘っておられると知らされて、ずっと祈って来まして迎えた6月8日朝、いつも通うスコットランド自由教会（在ロンドン）のペンテコステ（聖霊降臨記念）礼拝で使徒言行録7.54-8.1を聴きました。（実はまだこのとき、メティカフ先生がすでに前の夜に天に召されたことを知りませんでした。）

その聖書箇所は、2000年前、悔い改めを説く説教に怒った人々の無数の投石で殉教したステファノ（英名・スティーヴン）が絶命する場面でした。そのステファノの最期の言葉を読んだとき、同じ名前を持つメティカフ先生のことを思いました。：

「『主イエスよ、わたしの霊をお受けください』と言った。それから、ひざまずいて、『主よ、この罪を彼らに負わせないでください』と大声で叫んだ。ステファノ（スティーヴン）はこう言って、眠りについた。」

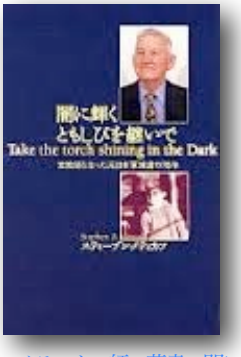
英語礼拝に続く私どもの日本語礼拝も終え、夜帰宅して、メティカフ先生の一日遅れの訃報を受け取りました。赦しと愛に生きた真の“神の人”、もう一人のスティーヴンが、ペンテコステに天に引き上げられたことは、まさに生きて働かれる神がなされたことであり、その死にゆく死に方でさえ、主を証しする宣教者の生き様であったと心に刻みました。

故ジョージ・メティカフ先生（OMFの前身のCIMの中国宣教師）が雲南省のリス族の村で働き、新約聖書・「使徒の働き」をリス語に翻訳しているときに生まれた子が、スティーヴンと名付けられ、87年後のペンテコステ前夜に召され、翌朝のペンテコステ礼拝で、その“スティーヴン”の聖書箇所が礼拝で朗読されたことは、「主が与え取られた」（ヨブ記）のだと、生きて働かれる神の業に深く畏敬の念を抱きます。

少年期：中国

日本語のダジャレの好きな、お茶目な一面を思い出すと、地上では、もうお会いできない惜別の思いがこみ上げて来ますが、病の痛みから解放されて、今は天の神の許にあって、幼少期からほとんど一緒に長く住むことのなかったご両親や、愛するエリッ

ク・リデル先生と再会されていると思うと、安堵と感謝で一杯です。




メティカフ先生を知る多くの方々の上に、主のお慰めがありますように。そして、メティカフ先生が示された福音の恵みが、ますます祝福されて、主が再び来られるまで、メティカフ先生を知らない多くの人たちにも、こぼれ流れ、脈々と注ぎ続けられますように。まだ生かされている私どもが、力強くその遺志を継いで行きたいと願い祈ります。

メティカフ師の著書；闇に輝くともしびを継いで　（いのちのことば社）
http://www.wlpm.or.jp/forest/1283.htm

## Tribute in Funeral at Trinity Road Chapel in London on 20th June 2014

Words are not much comfort in this hour of sorrow, but I would like you to know how deeply we feel for his family and all friends of him.

Specially, Reverend Stephen Metcalf was so much a part of Mrs Metcalf's life, we understand what a great loss this must be to her. We'll also miss him.

After his retirement in 1990 as a missionary in Japan for 38 years, he has continued to work for Japanese in London and all in UK as a co-worker of JCF, also all in Europe, through the Japanese Christian Conference in Europe.

In Japanese, "Reverend" is "Sensei". So, Reverend Metcalf is called "Metcalf Sensei" among us, with respect and affection.

Everyone charmed his gentle and humorous talk with affectionate smile, and he was an expert of punning up on Japanese words, actually. And as you know, he could speak a language of the minor tribe in China, similarly, the local dialect in North Japan, as well. And he also knew some very old and polite Japanese-talking way, which distinguished his character of earnestness and humor.

His preaching always pointed Jesus Christ and showed what is His love. Personally, his sermon from the Gospel according to Luke, Chapter 22, Verse 31 & 32, comforted and encouraged me being in a crisis of my life. Then, before my telling him the details, without any words, he just hugged me and said, "I understand your suffering". He was able to comfort me with confidence, because he'd had an experience of the physical and mental suffering under the Japanese forces in China when he was just a boy, but he forgave us and loved all of us. In this funeral, awesomely, we confess our sin to God and ask the Lord to forgive us.

Metcalf sensei has spread the fragrance of Christ, and just completed the way to be sanctified, so, we praise the Lord and thank Him. Now, the heaven is opening its gate to welcome Metcalf sensei, and soon, he will see his parents, Reverend Erick Liddell and all Christians already passed away.

Soli Deo Gloria
Revd Hiroshi Ogawa

---

# 私を待っておられた先生

## ホームズ恵子

### アガペ・ワールド代表

メティカフ宣教師に始めてお会いしたのは、1993年頃だったと思います。まだAgape Worldの活動が始まって2,3年の頃でした。当時JCFで証をさせていただいたり、和解礼拝もしていただきました。

そんなある日、メティカフ先生が15歳の時、中国で日本軍の民間人抑留者として捕らえられていたことを話してくださいました。恩師、エリック・リデル宣教師の影響を受けて、15歳のスティーブン少年が日本人のために祈るようになったこと、若くして収容所で亡くなった恩師の棺を担いでいた時に、生還できたら宣教師として日本で主に仕えることを誓ったことなど幾つもの思い出を話してくれました。

先生はアガペの和解の旅に2003年に参加され、東京に滞在中は、宣教師時代に先生にお世話になった方々の訪問が後を絶ちませんでした。この時いのちのことば社が先生のことを尋ねられ、本にする話が出ました。

アガペ和解の旅で、学校訪問

我が家での元捕虜の方々と日本人とのランチョンパーティに、先生と奥さんのエヴリンが数度参加してくれました。

最近、突然 先生の息子さんから「父が入院しました。あなたに会いたがっています」という連絡が入りました。彼は入退院を繰り返していたようです。「今行かなければもう会えない」と思いました。　我が家に滞在していた塩釜バプテスト教会の大友牧師に見舞いに行くことを話しましたところ、牧師は非常に感動して、一緒に病院へ行ってくれました。

病院では、先生は人口呼吸器でやっと呼吸できる状態で、苦しそうでした。「私を待っていてくださった。」と思いました。先生はこちらの話すことは分かり、私の手を握り締め、瞬きで会話をしました。大友牧師が先生に日本でご奉仕下さったことの感謝を述べました。私たちは賛美し、祈りました。

その夜、息子さんからのメールで、先生が主の元に帰られたことを知りました。先生は天国で素晴らしい人生を再出発しました。新しい体、完全な健康、永遠の若さを与えられ、聖書に出てくる素晴らしい人たちとの交流の日々、何を話しているのでしょうか。

メティカフ先生との談笑：筆者

主の前で賛美し、天使たちとダンスもしていることでしょう。そのうち私たちも先生に会えますね。天国に行けば、主をはじめ、多くの敬愛する人たちに会えると思うと、死ぬことも楽しみです。

メティカフ先生、待っていてくださいね。

# イエス様を信じる信仰の故に


馬場晶子

ロンドンJCF


2月始めメティカフ先生の手術のことをお聞きし、ロンドンＪＣＦでもお祈りしていました。先生には直接お電話をし、お見舞いするのに都合の良い時期を聞いていました。

先生は「簡単な手術だから、一週間もすれば、元気を取り戻すでしょう。」とおっしゃっていたので、安心していました。先生とはしばらくお会いしておりませんでしたので、術後には是非お会いしたいと思っていました。

ゲルスタ牧師夫妻と談笑：ワイボストン2011

ＪＣＦにご夫妻そろってお出でになったのは、2010年ヤング先生の就任式が最後だったと思います。その時の写真には、盛永先生ご夫妻、ヤング先生ご夫妻と共にメティカフ先生ご夫妻がにこやかに写っています。お説教のない時はいつも後ろの席でひっそりと座っておられましたが、そのまなざしはいつも私たちを暖かく見守っておられるようでした。

ロンドンＪＣＦは無牧の中、2月末から3か月間韓国人のパーク牧師がアメリカからご奉仕に来て下さり、委員として忙しい仕事の中、先生をお見舞いすることが叶わなかったのですが、パーク牧師がアメリカに帰国された5月27日夕刻、私たち夫婦は先生の入院されている病院に駆けつけました。

数日前に自宅へお電話した際、最初の簡単な手術が大手術に至ったこと。その後自宅療養されていたが、腸閉塞を起こし、再入院されていることを知りました。

病院にお見舞いに行くと集中治療室から一般病棟に移されていましたが、その朝から酸素濃度が下がり、酸素マスクをつけておられました。チューブにつながれ、酸素マスクの中、私たちを見ると一生懸命に日本語で話かけて下さいました。途切れ、途切れでしたが、「イエス様がおられますからね。大丈夫ですよ。」というようなことをおっしゃっていました。涙を流して私たちとの再会を喜んで下さり、私も涙、涙で先生の言葉をはっきりと聞きとることはできませんでした。帰りがけに主人が先生の手を握り、日本語でお祈りし、先生も「アーメン」とはっきりお応えになりました。

クック師と：ワイボストン2011

その夜から容態が急変、再度手術を受けられ、それから10日間再びＩＣＵへ。主人と息子がそんな中先生をお見舞いに伺い、痛みと苦しみの中、ほとんど意識朦朧の中、お祈りをして帰ってきました。お元気になって欲しいという思いより、早く主に苦しみを取り除いて下さいという祈りが強くなってきました。最後は一般病棟に移され、少し良くなってきたというニュースを息子さんから受け取った翌日の夜、先生は苦しみから漸く解放され、天国へ帰って行かれました。

私たちが最初にお見舞いに行った日が、意識のある最後だったようです。お見舞いに行き、元気になってくださいねと励ますはずが、その時の私は一生懸命、「先生長い間日本人の私たちの為にありがとうございました。」と、最後のお別れをしている自分がおりました。

この度の先生の入院がきっかけとなって、先生ともう一度お会いできたことは、神様の摂理としか言いようがありません。また、JCF始め、ロンドンの日本人クリスチャンが中心となって、先生を天国にお見送りできることは大きな喜びです。

主イエス様を信じる信仰のゆえに、不可能が可能となった先生のこれまでの生涯を思い起こし、このことを若い世代に伝えていかなければならないと強く思いました。先生との天国での再会を楽しみに。。。

ロンドンJCF 2010

## 「天の御国には時間がありません。」

山形澪
エディンバラ日本語教会

私の母は、メティカフ先生によって神様の愛を知り、クリスチャンになりました。

以前、母がメティカフ先生に「先生が先に天の御国に入りこちらで会えないと寂しいです。でも会ったときは先生お久しぶりという感じですか？」と質問したところ、先生は「いいえ、天の御国には時間がありません。さっきまで一緒だったでしょ？」と答えられたそうです。

先生が天に召されたことで、今はたくさんの人たちが寂しい気持ちになっていますが、またすぐに先生とお会いできることに大きな希望を持っています。

メティカフ先生、いつも大きな愛をもって教えてくださり、ありがとうございました。

キリスト者の集い：スイス・エメッテン　2006

## 「柔和な人々は幸いである。」

### メティカフ先生の信仰と生き様を通して

マーラ聖子
ロンドンJCF

私が足を初めて足を踏み入れたロンドンJCFで、宣教の働きに加わっておられた先生は、いつもおだやかで温かな笑顔と言葉で教会に来られる方々を迎えてくださっていました。その主に倣う者としての柔和で、いつも御言葉に忠実なお姿は、日本での働きにおいても全く同じであったことを先生のお説教の中で学びました。

日本で、スリッパを履き違えられたまま講壇に立たれたというような異文化体験をユーモアを持って話される一方で、ご家族の生死に関わる大変厳しい状況をも全て主に委ねて乗り越えてこられた先生。最近、偶然にも、先生が幼少期を過ごされた中国雲南省のリス族の集落では、今なおキリスト教の教えが根付いていることを知りました。

先生のご家族、そして先生を通して撒かれた福音の種と福音が、今後もより多くの方々へ届くことを祈りつつ、先生をこの世に送ってくださった主に感謝致します。

THE TIMES
Obituaries

News | Opinion | Business | Money | Sport | Life | Arts | Puzzles | Papers

Welcome to your preview of The Times

Steve Metcalf

Last updated at 7:18PM, June 20 2014

Steve Metcalf

Post a comment
Print
Share via
Facebook
Twitter
Google+

Missionary whose life and teaching was changed for ever by a wartime meeting with the Olympic athlete Eric Liddell

In the winter of 1944-45 Steve Metcalf, then just 17, was suffering the privations of the Japanese civilian internment camp at Weifang, northern China, when a balding, middle-aged Scottish internee approached him with a pair of running shoes, repaired with discarded string, to replace the threadbare ones on his feet.

Metcalf took them gratefully. The fact that the Scotsman was Eric Liddell, Olympic 400-metre champion in the 1924 Games, and that the running shoes no doubt meant a great deal to him, did not dawn on Metcalf. His feet were cold and Liddell was too diffident a man to

6月20日の新聞 "The Times" 上のメティカフ先生の記事

## 想い出のアルバム